

平成26年度

入学試験問題

(40分)

国 語

(アカデミーコース)

学校法人 成美学園

福知山成美高等学校

受験上の注意

- 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 解答はすべて解答用紙に記入下さい。
- 試験中に問題冊子および解答用紙の汚れなどに気付いた場合は、手を上げて監督者に知らせ下さい。
- 問題の答えは、ていねいな字で書き下さい。

① 次の文章は日本語をどのようにとらえるかについて書かれたものです。

※ 文章の途中で出てくる『漢字』『英単語』の解釈については諸説ありますが、「ここではあくまでも一つの説があるという前提で、後の問いに答えなさい。(字数については、句読点、「」なども一字に数えるものとする。)

現代国語と呼ばれる日本語の体系は、明治維新以後、多くの先人たちの努力によつて創造・改善され、今日に使われているような形のものに出来上がった。明治初期には、これらの先人たちは、外国語の中にある熟語の多くを日本語に移し換え、それらを表現するのに漢字を用いた。漢字一つひとつが、固有の意味を持つているからであった。漢字は表意文字なのである。このような表意文字としての漢字を利用して、いくつか組み合わせることにより、新たな単語や熟語を作り上げたのであった。その際、漢字一つひとつがそれぞれ固有の意味を持つので、私たち日本人は、それらを見れば意味が読みとれるのだが、結果は、同音異義の熟語がたくさんできてしまった。発音を聞いただけでは実際に何を意味するのかわからない^aという事態が生じたのである。(1)使われている漢字を見れば、意味をほとんどまちがわずに理解できるのだから、書きことばとしては困ることがなかった。

今見たように、漢字はそれぞれに固有の意味が込められているので、漢字を用いた熟語には、それ自体が持つ意味が含まれている。だが、話しことばとなると、音だけが耳に入るので、熟語を個々に取り上げたのでは何を意味するのかわからない。(2)花と鼻、川と皮など、音が同じものについて「ハナ」と「カワ」のように仮名で書かれていたら、意味をとるのは不可能である。後に触れるように、文脈(context)の中で用いられる場合には私たちはほとんど困らないが、単独で示されたのでは何のことかわからない。話しことばでの使用における難点がここにある。いくつかの漢字をつらねて作られた熟語でも同様である。先に挙げたのは、漢字一文字の場合だが、漢字二文字の場合にも同様の難点がある。例えば「セイカ^A」と書かれたり話された時、これが単独に示されたのでは意味するところは全然わからない。この仮名三文字に対する漢字の熟語はたくさんある。

私たちは、漢字で書かれていれば意味をとり違えることはまずない。漢字による表現には、数多く同じ音で表されるものがある。(3)読む側が意味について誤解することはまずない。それぞれの漢字に固有の意味が込められているからである。例えば、次に掲げる英単語の意味を、見ただけで理解できるだろうか。

これらの英単語のうち、三番目と四番目のものは、それぞれ数学、物理学を意味しており、著者の専門分野にも関わるから意味がわかる。だが、これら二つ以外は、私も英和辞典を参照しなければわからない。日本語では、これらに当たる語は、この順に「高所恐怖症」「閉所恐怖症」「再生・復活」および「白血病」を表わす。どうだろう、漢字で表してみれば、初めて見た人でもだいたいのところは理解できる語となっていることに納得がいくことであろう。このように漢字の組み合わせで表わせば、何を意味するか推測することが可能なのである。一方、先ほど挙げた英語の単語は、見ただけでは意味するところがわからない。漢字の使用には、こんなすばらしい利点があることを私たちは忘れてはならない。

今述べたような利点は、漢字にはそれぞれ固有の意味があることによる。(4) 漢字をいくつか組み合わせで作られた熟語は、個々の漢字の意味を超えた情報を私たちに伝えることができる。漢字を使って文章を作れば、平仮名や片仮名を使った場合では表現できない多様な意味を込められる。そのうえで、それぞれの漢字が決まった意味を持っているから誤解されることがない。このように、漢字を使うことにより、豊かな世界が文章表現の上に広がるのである。今まで多くの人によって漢字学習の難しさが指摘され、漢字は必要悪だとすら発言する向きもある。だが、漢字が使えることから多種多様な熟語が工夫され、私たちの日常生活を豊かにしてくれる。平仮名と片仮名という日本製の文字が漢字と組み合わせられて、表現上の豊かな世界が実現するのである。(中略)

日本人の能力がすばらしいというか、世界のいろいろな国の人々とまったく違ってユニークだと結論したくなるのは、同音異義語がある文脈の中で聞いた時、頭の中にその語の漢字表現がどんなものか瞬時に浮かんでいくということである。本人は意識してはいないようだが、漢字表現が脳裏に浮かばなかったら、いくら文脈の中でわかるといっても理解は不可能である。こんなすばらしい能力は、たぶん日本人以外には備わっていないのではないか。このような能力が日本人にあるのは、日本語文による表現に固有な漢字と二つの仮名文字による用法があり、それらが大多数の日本人にほとんど何の困難もなく習得されているからだ、と私は言いたいのである。こんなすぐれた能力は、幼児の段階から文字に親しんできた結果、獲得されたにちがいない。たいていの場合、意識することがほとんどなく、同音異義語のどれが文脈の中で使われているのが、聞きながら瞬時に理解できる能力は実にすばらしい。こうした理解が難しいと感じた時、話している当事者は、例えば「お化けの力ガク」という表現で「化学」と表すというふうに語る。しかしながら、こんなふうに断りを入

れて誤解のないように私たちが試みる場合は実際にはあまり多くない。このことについては、多くの人たちが自分の経験から十分に理解されていることであろう。

(5) 同音異義語にはたくさん用例があり、私たち日本人の間の会話や講演などで頻繁に使われている。このような事情があるがために、私たち日本人は母語である日本語の学習が容易でなく、日本語の使い方がなかなかうまくいかないのだという批判がある。

しかし先に触れたように、同音異義語によって大変な苦勞を負っているという人の数はあまり多くはないのではないか。このように言うのは、ほとんど意識することなしにこれらの話を聞いた時、脳裏に漢字が浮かび、ほとんどの場合、誤解することがないからである。語られる文脈の中でそれとわかるように、ほとんどの場合、正しく使われているからである。こんなすばらしい能力を私たちは持っているのである。

日本語では、英語その他の外国語と違って、話しことば・書きことばの両者でほとんどの場合、主語が使われない。そのせいで、主語がないから、何が主題なのか明らかでない。こんなあやふやな言語としての体系を日本語がとっているから、私たち日本人の思考があいまいとなり、論理的に物事の処理ができないのだという主張が一部でなされている。だが、私たちも主語を用いなければ文意が明確でない場合には、きちんと主語を据えて語ったり書いたりしてはいないか。私たちは自明というか、誤解されない場合のみ、主語を省略しているだけなのである。英語ほかの外国語の文法体系に対しある種のコンプレックスを抱き、日本語の文法体系がなっていないと主張する人がいるのだとしたら、誤解もはな^て○○○○と**言うべき**なのである。私たちは誤解が生じる余地のない時にだけ、主語を省略しているのである。(中略)

日本に漢字文が伝わった時、古代に生きた人々は片仮名文字を発明し、それを用いて漢字文を読み下す工夫を見出した。このことは当時、日本語の体系がどのような形であったとしても、すでに確立していたことを意味する。当時の私たちの祖先は助詞を使うような形式に日本語の祖型を作りあげていたにちがいないのである。このようなすごい発明を飛鳥時代にはすでになしとげており、漢字文の音による発音を日本人に合うように作り直して読んでいた。この伝統は現代にまで受け継がれてきており、私たちは漢字文を日本語の体系により、読み下せるようになっていく。助詞があるおかげで、独立した音と音の連続でなく、和らげられた表現となるのだ。こんな穏やかな語法が、たぶん文字による表現法を学ぶ以前から日本語にあったのだと推測される。これは日本人の独創であったのだと言って

よい。漢字文では使用される漢字にはそれぞれ固有の発音があり、それらがつらねられて読まれるから柔らかな音の連続とはならない。そうした音の連続は、必然的にぶつ〇〇〇〇な響きを持つものになる。同様の事情は、英語・フランス語その他の言語の体系でも同様に認められる。韓国語の体系は日本語のそれと似ているので、話すのが理解できなくても耳に穏やかに聞こえるのである。中国語でも、漢字文は使われる漢字については語順が決まっている。この点は英語その他の外国語と同様である。ここで英語文を取り上げてみよう。例えば、

I go to school.

という表現では、並べる単語の順序が決まっている。話しことばでも同様に、順序が決まっている。この順序の通りに話したり書いたりしなかつたら、文としては意味をなさず、ナン〇〇〇〇な表現となってしまう。

こうした剛さ、あるいは融通の利かなさが、英語ほかの多くのことば（言語）の体系にある。この剛さを私は剛性 (rigidity) と名づけているが、このような性格があることにより、話しことばにしても書きことばにしても、表現されたもの（文にしても、話しことばにしても）の意味が厳密に決まる。したがって、論理的に見て厳密な文章表現が可能となる。話しことばによる表現でも同様である。日本語の場合はどうかと振り返ってみると、こうした剛性は認められないと言つてよからう。先の英語文では、単語の用いられる順序が決まっているが、日本語ではこの順序通りになぞらなくてもよい。この融通性は、助詞が使えることから可能となり、日本語による表現が穏やかとなる理由なのである。もう一度繰り返すと、日本語の体系では話しことばにしても書きことばにしても、英語文における、S + V + O + C という基本型がなくても表現には困らない。助詞があることにより、いろいろな表現を可能とするからである。もしかしたら、このような日本語の特性が、論理思考の点で、私たちが弱点をさ〇〇〇原因を作りだしているのかもしれない。人と人との付き合いでは、ことばが大切な役割を果たすが、日本人同士の間ではこのような日本語の特性が、付き合いを穏やかなものとしているのだと言つてよさそうである。英語ほかのヨーロッパ起源の言語の体系にも、また中国語のそれにも、このような性格はない。これらの言語の持つ剛性が、これらの言語を母語とする人たちの性格を決めているのかもしれない。

へ 出典 『日本語は本当に非論理的か』 桜井邦朋

※設問の都合上、文章を改めた部分があります。

問1 ——— 線部Aのように「セイカ」と発音する①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

(とめ・はね・はらいに注意し、楷書で丁寧を書くこと。)

- ① 人気歌手のセイカが私の町にある。
- ② 祖父の墓にセイカを供える。
- ③ セイカの授業以外に補習がある。
- ④ ケーキなどの食品を作るセイカ工場を見学する。
- ⑤ セイカのころ、恩師に暑中見舞い状を送る。

問2 ——— 線部a～dの品詞名を答えなさい。

わからない^a

不可能^bである

まず^cない

どう^dだろう

問3 (ア)～(エ)に入れるべき語句を書きなさい。

ただし(ア)(イ)(エ)はひらがな、(ウ)はカタカナで記すこと。

(ア) はな○○○○

(イ) ぶつ○○○○

(ウ) ナン○○○○

(エ) さ○○○

問4 (1)～(5)にあてはまる語として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア したがって

イ つまり

ウ そして

エ 確かに

オ だが

カ 例えば

キ そこで

問5 ——— 線部B「日本人の能力」とあるが、なぜ日本人にこのような能力が備わるのか、四十字以内で書きなさい。

問6 ——— 線部C「日本語の文法体系がなっていないと主張する人」とあるが、彼らがそう主張する根拠を四十字以内で書きなさい。

問7 ——— 線部D「穏やかな語法」とはどういうことか、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 飛鳥時代から続く、助詞を用いることによつて漢字音の連続を避け、音感を大事にした日本語の語法。

イ 助詞を用いることによつて、漢字文で使用される音の固有性を尊重しつつ、耳に入る音を和らげられた日本語の語法。

ウ 助詞を用いることによつて、独立した漢字文で使用される音の連続を避け、音感を和らげられた日本語の語法。

エ 助詞を用いることで、漢字文を日本語の体系により、読み下せるようになった日本独自の語法。

問8 ——— 線部E「言語の持つ剛性」とはどういうことか、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ある言語体系の中に存在する、語順が固定されることによつて論理的に見て厳密な意味表現を可能にする言語の性質。

イ 多くの言語の中にある、語順を決めることによつて論理思考を深め厳密さを求める、剛さに例えられる性質。

ウ 日本語以外の言語に多く見られる、論理的に見て厳密な文章表現を可能とする、単語の順序が固定される性質。

エ 英語ほかの多くのことばにある、並べる単語の順序が決まっており、文法の基本型に忠実なことば（言語）の性質。

問9

本文の内容をふまえ、**不適当なもの**を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本人が表意文字である漢字を用いて作った熟語は、初めて見ても意味をおおよそ推測することができる。
- イ 数多く存在する同音異義語は、話し言葉において単独で用いられたときは、意味がわからない場合がある。
- ウ 日本語では、漢字・ひらがな・カタカナを多様に組み合わせることで豊かな文章表現の世界を形作る。
- エ 多くの用例がある同音異義語のために、日本人は日本語の習得がうまくいかないという批判がある。
- オ 英語では単語の並ぶ順番が決まっており厳密な文章表現となる一方、日本語は主語を省略するなど文法体系が確立していない。
- カ 母語として用いる言語の剛性などの特性が、その国の人々の性格を形作っている可能性がある。

② 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数については、句読点、「」なども一字に数えるものとする。)

今は昔、遣唐使の唐もろこしにある間に、妻をまうけて子をませせつ。その子、いまだいとけなき程に日本に帰る。妻に契りて曰く「異遣唐使行かんにつけて、消息あるべし。またこの子、乳母離れん程には迎へ取るべし」と契りて帰朝しぬ。母、遣唐使の来ることに、「消息Bある」と尋ぬれど、敢へて音もなし。母、大きに恨みて、この児を抱きて日本へ向きて、児の首に遣唐使それがしが子といふ札を書きて結すくひつけて、「宿世すくせあらば、親子の仲は行きあひなむ」と言ひて、海に投げ入れて帰りぬ。

父ある時、難波の浦の辺を行くに、沖の方に鳥の浮かびたるやうにて、白きもの見ゆ。近くなるまに見れば、童にみなしつ。怪しければ馬を控へて見れば、いと近く寄り来るに、四つばかりなる児の白くをかしげなる、波につきて寄り来たり。馬を打ち寄せて見れば、大なる魚の背に乗れり。従者を持ちて抱き取らせてみれば、首に札あり。さは、わが子に **X** ありけれ、唐にて言ひ契りし子を問はずとて、母が腹立ちて海に投げ入れけるが、然るべき縁ありて、かく魚に乗りて来たるなめりとあはれに覚えて、いみじう **Y** かなしくて養ふ。遣唐使の行きけるにつけて、この由を書きやりたりければ、母も今ははかなきものに思ひけるに、かくと聞きてなむ、稀有けうのことなりとよろこびける。

さてこの児、大人になるまに手Zをめたく書きけり。魚に助けられたりければ、名をば魚養うをかひとぞつけたりける。七大寺の額がくどもは、これが書きたるなりけりと。

〈出典 『宇治拾遺物語』〉

(注1) 七大寺の額ども…奈良にある七つの大きな寺院(東大寺・興福寺・元興寺・大安寺・薬師寺・西大寺・法隆寺)にある、寺の名を記した額。

問1 ——— 線部①と②を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。

- ① 行きあひなむ ② いみじう

問2 ——— 線部A、Cの古語について、本文中の解釈に最も意味が近いものを選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|-------|-----|--------|---|--------|---|------|---|-------|
| A | いとけなき | (ア) | 幼い | イ | かわいい | ウ | 恋しい | エ | かわいそう |
| B | 消息 | (ア) | 手紙 | イ | 土産 | ウ | 来訪 | エ | 案内 |
| C | かなしく | (ア) | 過去を悔やみ | イ | かわいがって | ウ | 心を痛め | エ | 心ひかれて |

問3 係り結びの法則に基づき、本文中の **X** に入る係助詞を書きなさい。

問4 ——— 線部Y「稀有のことなり」とはどういうことか、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 母親の手によつて唐から海に投げ入れられた子が、魚の背で命をつなぎ日本にたどり着き、偶然にも遣唐使に拾われたこと。
- イ 遣唐使の子が、一度は死んだと思われたが、長い距離を大魚の背で育てられ、命をつなぎながら日本に帰ってきたこと。
- ウ 母親に疎まれるあまり、愛を十分に受けられなかった子が、魚の背に乗せられ日本にたどり着き、父の従者に拾われたこと。
- エ 海に投げ入れられ、死んだと思われた遣唐使の子が、魚の背に乗って日本に着き、実の父親に保護され育てられていること。

問5 ー線部Z「手をめでたく書きけり」の部分を現代語訳しなさい。

問6 本文中に、「 」をつける部分がある。最初と最後の六字を書きなさい。

問7 本文の内容をふまえ、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 魚養は幼い頃、魚の背に乗せられて日本にやってきた経緯があるが、やがて七大寺の額に自らの名を残すほどの高僧になった。
- イ 遣唐使それがしの父が、ある時難波の浦で見つけた白いものは四才くらいの子どもであり、首に目印となる札をかけていた。
- ウ 遣唐使の妻は、宿命であるならば父と子は再会できるだろうという考えと遣唐使に対する恨みから、子どもを海に投げ入れた。
- エ 唐の妻との間に子をもうけた遣唐使は、妻と子を迎えに来る約束を交わしていたが、その後死ぬまで一切の連絡をしなかった。